

non sibi

奨励	山本 真司〔やまもと・しんじ〕
奨励者紹介	同志社国際中学校・高等学校教諭・チャブレン

イエスを十字架につけたのは、午前九時であった。罪状書きには、「ユダヤ人の王」と書いてあった。また、イエスと一緒に二人の強盗を、一人は右にもう一人は左に、十字架につけた。そこを通りかかった人々は、頭を振りながらイエスをののしって言った。「おやおや、神殿を打ち倒し、三日で建てる者、十字架から降りて自分を救ってみろ。」同じように、祭司長たちも律法学者たちと一緒に、代わる代わるイエスを侮辱して言った。「他人は救ったのに、自分は救えない。メシア、イスラエルの王、今すぐ十字架から降りるがいい。それを見たら、信じてやろう。」一緒に十字架につけられた者たちも、イエスをののしった。

(マルコによる福音書 15章25—32節)

読まない新聞

「一九四二年に父が亡くなり、大阪が大空襲を受けるという情報が飛び交う中で、母は私と妹を先に故郷の島根県出雲市の祖父母の元へ疎開させました。その後、母と二歳の弟はなんとか無事でしたが、家は空襲で全焼しました。

小学校五年生の時から、朝は牛乳配達に加えて新聞配達もさせてもらいました。日本海の風が吹きつける海浜の村で、毎朝四十軒の家への配達はずらい仕事でしたが、戦争の後の日本では、みんながずらい思いをしました。

学校が終われば母と畑仕事。そして私の家では新聞を購読する余裕などありませんでしたから、自分が朝配達した家へ行って、縁側でおじいさんが読み終わった新聞を読ませていただきました。おじいさんが亡くなっても、その家への配達は続き、おばあさんがいつも優しくお茶まで出して、『てつちゃん、ペンきょうして、えらい子になれよ』と、まだ読んでいない新聞を私に読ませてくれました。

そのおばあさんが、三年後に亡くなられ、中学三年の私も葬儀に伺いました。隣の席のおじいさんが、『てつんど、おまえは知ったか？おばあさんはお前が毎日来るのがうれしくて、読めないのに新聞をとっておられたんだよ』と。

もうお礼を言うこともできないおばあさんの新聞・・・涙が止まりませんでした」〔注1〕。

このエッセーは今年21回を迎えた「新聞配達に関するエッセーコンテスト」(日本新聞協会販売委員会)の大学生・社会人の部で最優秀賞を取られた78歳になられる岩國哲人(てつんど)さんの手になるものです。長い年月を経て、語ることのなかったつらいながらも心に強く刻まれた思いを感謝を込めて公にされました。実は、岩國さんはおばあさんの言葉どおり、「ペンきょうして、えらい子に」なられたのです。東京大学法学部に進み、日興証券に入社し、その後、モルガン・スタンレー投資銀行を経て、メリルリンチ日本法人の社長、会長を歴任、1989年に島根市長に当選されました。市長在任中は、「行政は最大のサービス産業」「小さな役所、大きなサービス」という持論をもとに、ショッピングセンター内の行政の土・日サービスコーナーや、樹医制度の創設、総合福祉カードの導入、日本最大の木造ドームの建設など次々と新施策を実現し注目され、出雲市を2年で、トヨタ自動車、ソニーなどと並ぶ優良自治体に導かれました。

しかし、皆さんと分かち合うメッセージの中心はこの偉くなった「てつんど」に、ご自分には必要のない新聞を読む機会を与え続けた「おばあさん」のことなのです。

現代は見方によっては、個人が最優先される時代とすることができるといえるでしょう。「わたし」がすべてに先立つ価値をもっているのです。お気づきのようにこれは両刃の刃です。巷にはさまざまな出来事を通して耳に心地よい言葉が氾濫しています。それは「絆」であり、あるときには「おもてなし」や「世界にひとつの花」であったりします。しかし、当たり前のように語られる命の尊さ、人の尊厳は、本当の意味で守られているのでしょうか。また、わたしたちはお互いに聖書に示される黄金律「人にしてもらいたいと思うことは何でも、あなたがたも人にしなさい」(マタイによる福音書7章12節より)や「己の欲せざるところ、他に施すことなかれ」と『論語』に示すような金言を実践しているのでしょうか〔注2〕。

おのれを助けい

さて、学んでおりますペリコーベ(朗読した聖書の箇所)ではイエスは嘲笑されています。「ほんまに阿保かいな！お宮さんを壊して三日で建てるそやけど、礎柱(はりつけばしら)から降りて、おのれでおのれを助けい！」〔注3〕と通りがかりの人びとは頭を振りながらののしって記されています。また、祭司長や律法学者もイエスを侮辱しています。「お助けさんよ、イスラエルの王(みかど)よ、今すぐその礎柱から降りて来てみい。それを見たら、お前を力とも頼りともしてやるがな」。

この人たちの言うとおりのことです。ご自分を助けることだけが苦手な救い主イエス—実は、この情けないお姿が聖書の信仰を貫いている救いのあり方なのです。自分を捨てて相手のために生きる決意、これは生易しいことではありません。だからこそ、自己犠牲がテーマになっている出来事は感動を呼び、心に深く刻まれるのではないのでしょうか。

わたしのためにだけではなく

さて、同志社の創立者、新島襄がアメリカで最初に学んだ学校はフィリップス・アカデミーでした〔注4〕。この学校のスクール・モットーが「non sibi」なのです。「自分のためではなく」あるいは「自分のためだけにではなく」と翻訳できるラテン語の慣用語です。ここでは、次に続く言葉がありませんが、例えば、non sibi, sed patriae「自分のためではなく、祖国のために」〔注5〕とかnon sibi sed aliis、「わたしたちのためではなく、隣人(他者)のために」〔注6〕など多くの格言やモットーに見ることができます〔注7〕。

新島がアメリカで奇跡とも言える出会いを経験しています。善良で親切な人びとが次々と彼を導いていったことはよく知られています。non sibiを身に纏った人びとの支えで彼は豊かな学びと魂の成長を遂げることができたのです。そして、全身に受けたその精神を生涯にわたって同志社に注いだということができるでしょう。同志社の精神を学び、確認するとき決して忘れてはならないこと、それが「わたしのためではなく」という生きる指針ではないのでしょうか。この同志社に生きる私たちは学校を己が生きる糧の手段としてだけ用いてはなりません。ここで得るすべての糧を自分だけではなく、隣人のために、祖国のために、世界のために用いようではありませんか。それが真のグローバリズムであり、実は、自分だけを助けることができないイエスが示される豊かな人生への道標なのです。

新島襄自身のことばでこのお話を閉じることにしましょう。

「人の偉大さは学識だけでなく、私心のなさに現れる。多くを学んだ者は、学んでいない者よりも、しばしば自己中心的になりがちである。十字架上のキリストに目を向けよう。彼が私たちの模範である。ああ、キリストは何と高貴で、何と偉大で、何と恵み深く見えることか。私たちが自己を忘れ、真と善の大義のために、自分を惜しげもなく差し出そう。また真に悔い改め、謙虚になろう。私はこれを人の偉大さと呼びたい」〔注8〕。

(原文) Man's greatness is not merely in his learning but in his disinterestedness in self.

Much learned are often apt to be more selfish than unlearned. Let us look at Christ on the Cross. He is our example. Oh! how noble, how grand, how gracious He seems to us. Let us forget our self, and offer ourselves freely for the cause of truth and good. Let us be also truly penitent and humble. I call this the man's greatness.

(雑記帳 1884—1885 「備忘録」 1884年7月24日 病床にて の後に続く文章)

〔注1〕 2014年「新聞配達に関するエッセーコンテスト」(日本新聞協会)大学生・社会人の部 最優秀賞 岩國哲人『おばあさんの新聞』東京都渋谷区 78歳

〔注2〕 イエス・キリスト「人にしてもらいたいと思うことは何でも、あなたがたも人にしなさい」(『マタイによる福音書』7章12節より)孔子「己の欲せざるところ、他に施すことなかれ」(『論語』卷第八衛霊公第十五 二十四)ユダヤ教「あなたにとって好ましくないことをあなたの隣人に対してするな。」(ダビデの末裔を称したファリサイ派のラビ、ヒルレルの言葉)、「自分が嫌なことは、ほかのだれにもしてはならない」(『トビト記』4章15節)ヒンドゥー教「人が他人からしてもらいたくないと思いかかることも他人にはいけぬ」(『マハーバーラタ』5:15:17)イスラム教「自分が人から危害を受けたくなければ、誰にも危害を加えないことである。」(ムハンマドの遺言)文学者戯曲家のジョージ・バーナード・ショウは「黄金律というのはないというのが黄金律だ」"the golden rule is that there are no golden rules".といい、別の「人にしてもらいたいと思うことは人にしてはならない。人の好みとというのは同じではないからである」"Do not do unto others as you would that they should do unto you. Their tastes may not be the same"(Maxims for Revolutionists; 1903).という言葉を残している。(Wikipedia『黄金律』)

〔注3〕 マルコによる福音書15章30節 山浦玄嗣訳『ガリラヤのイエシュー—日本語訳新約聖書四福音書—』イー・ピックス出版 2011年

〔注4〕 Phillips Academy in Andover, Residential secondary school, New England. Established 1778. Academic excellence. Liberal arts tradition. 男子校として設立されたのがちに共学となる。 Phillips Academy HP notable Alumni Joseph Hardy Neesima: Class of 1867 First Asian to graduate from Phillips Academy Founder, Doshisha University, Kyoto [1875], now the largest private educational institution in Japan Non sibi. Not for self. Paul Revere forged (案出する) this motto into Phillips Academy's original seal 230 years ago. Whether it is helping a classmate

with a difficult math homework, taking on a leadership role in a school club, or participating in the dozens of service learning projects that take us into local neighborhoods and around the world, non sibi is a way of life.

〔注5〕 The unofficial motto of the navy. Translates to “Not for ourselves, but our country” the navy has no official motto but they also use *semper paratus* (always courageous) and *paratus et potens* (ready and able) and as stated above *non sibi, sed patriae*.

〔注6〕 Not for ourselves, but for others. Motto on the colonial seal of the State of Georgia, USA.

〔注7〕 その他の例 *Non sibi sed patriae*. Not for self, but for country.
Non sibi sed toti. Not for self, but for all or Not just for oneself, but for everyone.
Non sibi solum. Not alone for self.

〔注8〕 1884年7月25日記 同志社編『新島襄自伝』岩波書店、2013年 374頁

2014年10月29日 同志社スピリット・ウィーク秋学期
京田辺水曜チャペル・アワー「奨励」記録